

－滑り落ちたら違う道からまた登ればいい。－
女性初の報道写真家が“私達”に寄せるメッセージ

過去から現在に至り、メディアにおいて「写真」は人々の心を感化させ、強い影響力を持つ媒体として広く浸透している。伝統的メディアから新興メディアに至り、写真を使わないメディアは存在しない。時に写真は言葉よりも多くの事を語る。現代では20代の若者を中心に誰もがスマートフォンを持つようになり、誰もが目の前で起きた事件や経験した出来事を写真として記録できる時代となった。そのような中、我々は女性初のフォトジャーナリストである笹本恒子氏に焦点を当てた。笹本氏は「若者」に対して何を感じているのか、笹本氏にとって「カメラ」とは何か。現役のフォトジャーナリストが若者に寄せる“想い”を紐解いていく。

聞き手：早稲田大学政治経済学部政治学科3年 池田 優（高橋恭子ゼミナール・幹事長）
早稲田大学政治経済学部政治学科3年 大串 夕葵奈（同ゼミナール・副幹事長）



笹本恒子 SASAMOTO TUNEKO

1914年に東京・品川区に生まれる。笹本氏は103年の歳月をしなやかに生き抜き、フリーランスとして激動の時代に独自の道を歩んでこられた。1940年に写真協会に入社し、日本初の女性報道写真家として活動を始める。日独伊三国同盟から60年安保闘争など、戦前～戦後と数々の歴史の節目に立ち会ってきた笹本氏は1997年に「東京女性財団賞」、2001年に「ダイヤモンドレディ賞」、そして2011年には「吉川英治文化賞」や「日本写真協会賞功労賞」など数多くの賞を受賞された。

2017年には笹本氏と、同じく反骨のジャーナリストであるむのたけじ氏に焦点を当てたドキュメンタリー映画「笑う101歳×2 笹本恒子×むのたけじ」が公開。2018年、笹本氏は103歳となった今も「現役の写真家」として活動している。またプライベートでは写真の他に花やアクセサリ、服などの才能にも恵まれ、芸に秀でた女性である。

—池田「僕たちは21歳なんですよ、今日は沢山思い出話を聞かせて頂きたいと思っているのでお願いします」

うわあ。私もそういう時がありました。私が同い年の時は戦争中でしたからね。そう、26か27。そうですね。朝スイッチをピュッと入れたらダンダンダンと軍艦マーチが聴こえてきて。ちょうど私はね、お茶碗を持っていた。そしたら夫が立っていてスイッチを入れたの、そのジャンジャンが聴こえてきて。それで彼が「(戦争が) 始まった」って言った途端に持っていた茶碗を落っことしたの。その時、昭和16年12月8日でした。

—池田「昭和16年と言うと僕たちには想像できないですね、平成8年生まれなので(笑)1年前に成人したばかりで。笹本さんは9月1日にお誕生日を迎えたので103歳ですよ。本日はほんの気持ちですけどお誕生日プレゼントを。チョコレートがお好きと(著作に)書かれていたのでチョコレートのお菓子とフランス産のボルドー赤ワインを。」

罰が当たっちゃうわ。いや一嬉しい、嬉しい。ありがとうございます。ワインは赤ワイン？至れり尽くせりね。まあでもね、103年の間には何度も死んじゃおうと思った時がありましたからねえ。

—池田「笹本さんは数多くの趣味を持たれているようですよね、お洋服も素敵です。」

ええ、洋服は自分で作っています。はじめは絵描きになりたかったからね。でも絵描きでは食べられないと言われて。大急ぎで洋裁学校に通ったの。洋裁を裁断から覚えて。それで絵を描こうとして。そしたらアクセサリーもやるようになって。全て絵につながるように初めて見たの。色々しているうちに、写真を勧められて。

毎日新聞でカットを書いていたら

先程の軍艦マーチの後、ちょうどその頃毎日新聞でカットを書いていたの。そしたら社会部長が「社会部の記者が日中戦争の現場に行くんだ。日本は宣伝が遅れているから」って。いわゆるプロパガンダです。彼は社会部をやめて内閣情報部から資金を出してもらって写真協会を作ったの。だから帰り道に寄って見たらって。

—大串「それが写真との出会いだったんですね」

そう、それで写真ねえって。絵を描いている人間は写真を重く見ない。私は絵を描いていたからむしろ写真を馬鹿にしていたの。写真はパッと撮れるけど絵はそうはいかない。でもその時にロシアの新しい「シュールレアリズム」的な物を作って邦楽座で上映していると聞いて。映画の世界にも写真の世界にもそういったシュールな物を扱う所もあるのかなって思ったりして。そして林健一さんという方の事務所に寄りました。

林健一さんとの出会い

そしたら六つ切りの大きな写真にヒトラーとムッソリーニが演説している写真を見せられて。報道写真はこういうものなんですよと。報道写真なんて名前を聞いたのも初めてで。普通は新聞社の写真しか見たことがなかったから。日本は宣伝が下手で海外からよく思われてない。報道写真家は男の人は日本にも当時何人かいる。だけど女性はいない。

女性初の報道写真家、誕生

でもアメリカでは女性に何人かいらして。特にマーガレットバークホワイト¹さんはライフの表紙まで撮っていると。それがやはりドッキンでしたね。兄がライフを毎週買っていましたから。ライフの表紙写真を女の人が撮っているなんて凄いなって。そして林健一さんがやってみませんか。それで、マーガレットバークホワイトさんを見て、女の人にも出来るなら私にも出来るかしらって。それで有楽町に通うことになったの。それが始まりでね。

—池田「当時、“女性初”という響きは笹本さんにとってどうでしたか？」

恥ずかしかった。カメラ持って歩いたり銀座で脚立を立てたりしていると人だかりが出来ちゃって。カメラ持って歩いていると2、3人後ろからついてきます。そういう時代。絵の時は郊外でも銀座の時でも三脚立てて描いていると4、5人集まって見ていました。それと同じようにね、銀座だったらすぐ10人ぐらい集まっちゃう。

¹ 戦間期のアメリカを中心に活躍した、女性報道写真家。戦場カメラマンの先駆者。

女性ならではの“悩み”

その頃はまだスカートだったから恥ずかしいから大変です。研究してキュロットスカートにして。そのうちパンツにして。だけど逆に今度はパンツ履いて銀座を歩くと皆が付いてくるの。かえってカメラよりもパンツを見られちゃって。もう大変でした。だからちょっとでも三脚を立てて写真を撮そうとするとぶわあって人が寄ってきちゃうし。

—激動の時代 「女性」^{じょせい}としての笹本氏—

——池田「やっぱり当時は“女性が”っていうのが結構目を引くものだったんですよね。大変な時代ですよね。でも自分が先導している嬉しさみたいなものはありませんでしたか？」

いやあ、恥ずかしかったですね（笑）。一番いやなのは毎朝今でいう電通からニュースが回ってくるの。私の場合は上野動物園に東天紅が来ているからそれを写しなさいとかね。どっかで銅像が出来たから除幕式に行きなさいとか。紙を渡されるの。それを持って決まった時間に現地へ向かうのね。スピードグラフィックってアメリカのニュースカメラを持って。

女性は今珍しい存在

それで現地に行くと他社のカメラマンから「なんだなんだ女が来たぞ」って珍しがられて。親切な人は「嬢ちゃん嬢ちゃんこっちの三脚が空いたから使っていいよ」なんて親切な方がいて。身長も小さかったの。その時、ちょうど太平洋戦争が始まりました。

——池田「女性だから親切にされたってことも？」

最初はですよ、だんだんできるようになると違うの。男性心理。最初はわかんないから親切にしてくれるの。

——大串「だんだんちょっと厳しく？プロ意識とかで？」

ええ。私はよくわからないから公共の広場へ行ったらボーイさんが三脚持ってきてくれたからそれにちょっと乗って球場の方へ向けて撮っていたらお巡りさんが来て。「天皇の前で脚立に乗るやつなんかおるか」って蹴飛ばされたの。怖いよね。一緒に来ていたアメリカの学

生がびっくりして、天皇が見てないのに何が悪いのかって聞いたの。お家を写していただけないのに。日本では天皇が偉いから高いところから写しちゃダメなんだって。

東京大空襲での後悔

その後、戦争で我が家は焼けました。その時はちょうど千葉に一軒家を借りていました。夫は連隊招集に行っていて「管区内居住」といって管区内に住まなくてはいけなかった。東京から千葉は近いけれど帰ってはいけない。東京大空襲の時、東京湾を前にしてB29が入っていくのを見ていたの。何で写真を撮らなかったかって、写真を撮るどころじゃなかったの。いつ命がってね。その写真撮っておけば面白かったけど。ぶわあって火が広がって酷い有様でした。何で東京大空襲の時、写真を撮らなかったんだろうってね。

—職業“^{ほうどうしゃしんか}報道写真家”としてのプライド—

——池田「笹本さんって僕たちみたいな20歳の頃は気弱、恥ずかしがり屋だったそうじゃないですか。（※著作：『お待ちになって、元帥閣下』）」

恥ずかしがり屋。だから母がお使いに頼んでも役に立たないって。ああいいなさいこう言いなさいって言ってこないと、頼んだものを買ってくるだけでそのお婆さんが何を言ったかも言わない。だからカメラ持ったとき最初は大変だったの。外人は楽でした。エキスキューズミーって言ってね。逆に必要なこと以外喋らないから。簡単な英語でね。どこから来たのとか。日本人が逆に難しい。あのどちら様ですかとか。

『お待ちになって、元帥閣下』

女学校でハーフの先生だったのね、でも日本では英語は大学を出ても価値はないってだから女学校の最高年になった時は日常会話を一通り、教えてくださったの。それがカメラの時に役立ったの。各社カメラ持った人いたけれど、皆大学を出ていても英語が出来ない。お嬢さん頼むよ、英語でこう言ってくれよとか、ああ言ってくれよとか頼まれちゃって。それでマッカーサーにまで声を掛けちゃったの。マッカーサーと天皇は声を掛けちゃいけないのに。

——池田「恥ずかしがり屋であったのに、そういうことが出来たのは仕事だったから？」

仕事だったからね。結局そうなの。あくる朝データ持ってこないと部長からどうしたのって言われて怖いからね。

——池田「写真撮るときは、海外とかに出ていくものだから、しっかり撮ろうという思いは強かった？」

それはありましたね。写真協会で撮った物は世界50カ国のエージェントに送るんだから下手な格好の物はダメなのね。そんなのしょうがないからエキスキューズミーが役に立ちました。

—笹本氏が惹かれる人物像^{じんぶつざう}—

——池田「激動の時代でこの人に惹かれたという人物はいましたか？」

岡田首相なんかはにこにこしてくださってね。岡田さんは軍部の反対で半年ぐらいで首相の席をたったんだけど。

——池田「女性では？」

明治に生まれた女性よね。ちょうど私が大正の初めですからね。明治時代っていうのは女の人に何の権利もなかったの。女の人の不倫をすともう晒し者にされたのに、男の人は許されていた。選挙権みたいなのは男の人にはあって女の人には何にもない。とにかく男性本位だったの。

明治の“強い”女性達

赤ちゃんを背負いながら火を起こしてその合間に小説を書く。佐多稲子²さんだったりとか壺井栄さんだったりとか。名前が出たってことは男の人よりも何倍か努力したってこと。男の人は「おい飯、お茶、風呂」って言うでしょ。そんなもので彼女ははいはい、ってあかちゃん背負ってやりながら。佐多稲子さんや、絵描きなら三岸節子³さんだとかね。

2 昭和を代表する女性作家の一人。代表作『くれなゐ』（1936）、『私の東京地図』（1946）、日本共産党の内部抗争に取材した『溪流』（1963）など。

3 洋画家。女子美術学校卒。情熱的な色彩、重厚で力強い画風で知られる。

——大串「私この写真（沢村貞子⁴さんの写真）が一番印象に残って。こちらの方もあちらの方も読んでいると、すごい凛とした女性というか、強く生きた女性が出てきて。」

そうなの、皆明治の女性っていうのはすごいんですよ。でも皆優しいの。この方なんかそう、とても親切にしてくださった。変な意地悪おばさんみたいなのもいたけどね。現代は男性も女性も同じように優遇されているからいいけれど、この時代、女性は下に見られていたから。

——大串「一番印象に残っている人は？」

選べませんね、皆さん偉いから。私なんか皆尊敬しちゃう。明治の女性は男女の区別をされながらも生きてきたから芯が強い。けしてやたらに妥協はしませんね。家事やって赤ちゃんしょって、間に物を書いたりなさっているから、それは人の何倍か努力しているのね。

わたくし
— 私 の好きな物 絵と写真は親戚みたいなものですからね。—

——大串「笹本さん自身はお仕事とプライベートの両立は？」

お料理は大好きなの。食いしん坊だから。皆も食べるから。ワインは飲んでいますね。ワイン飲むのも30年以上ね。血圧が私低いのね。近所のお医者さんに行った時に血圧高くする何かいい薬ないですかって聞いたの。そしたら血圧に良いのはワインをちょっとって。これはしめたと思って。

——池田「あと料理の他に服とか、沢山趣味持っていらっしゃいますよね」

あまり仕事がないときは服屋さんをやったりしました。戦後はオーダー服の店が少なかったから。オーダー服の店をやっている友人に仕入先を聞いたりして。洋裁の製図をして裁つのは戦前になんとか習っていましたから。そんなのをしばらく青山の大通りでやっていたの。

4日本の女優、随筆家。生涯に350本以上の映画に出演し、幅広い役柄と個性的な演技で名脇役女優として活躍した。

——大串「とても素敵なお店でされていたんですね」

とても運が良かったの。絵だけでは食っていけないよって皆から言われて。じゃあ洋裁でもならおうかしらって。そしたら知り合いの呉服屋さんが呉服じゃあやっていけないって。それはまだ戦争中だったんだけど、洋服やりますって青山の一等地に洋装店を開くことに。ちょうど私が洋裁学校出る時だったから「恒子さんお願いします、すみませんけどうちでやってよ」って。すぐ就職決まってね。そんなことしていました。

——池田「お花やられたり、それから絵をやられたり、お料理をされたり、ネックレスを作られたり。色々なことをやられていますよね。できないことは？」

できないのは $1+2=3$ っていう数学が出来ない、それから歌が下手なの。よく家で歌っていると兄が調子外れ、ぬか味噌腐るぞって言っていたの。それほど歌は歌えない。それから代数というのが出来ない。ルート何みたいな。 $1+2=3$ ぐらいならできるけど。だからただ絵を描いたり物を作ったりはできるの。商売になっちゃえばね。

——池田「趣味が写真を撮る上で生きていますよね」

だから写真やらないかって言われた時にね、ライカにフィルムを入れて、日比谷公園にいつて何か写していらっしゃいって言われて。日比谷公園で35枚1本撮って、現像する人に渡したらお世話をしてくれた林健一さんが「絵をやっていたから構図は間違いない」って。

——池田「絵を描く時は風景画とかですか。僕も絵を6年間ぐらいやっていたんですよ。だからなんとなくわかります。水彩で。もしかしたらこれって写真の構図にも役立つのかなと。」

ええ、風景画を描く時はこうやってみるのよ。景色をね。そして手前に木を入れて遠近感出してって。それがカメラになるとカメラがやってくれるから。今からでも遅くないですよ。

——大串「私も元々絵が好きで最近は写真を撮ることが好きで一眼レフとか持っていて。」

あらそう。やっぱり、通じていますからね。絵も写真も親戚みたいなものですからね。だからそういうのもあったから写真の仕事はなくてもなんとなく食べてきましたよ。ネックレスやなんかを作って、粘土にガラスやらを付けてね。ビードロって言って東京中を売り歩きま

したよ。まず友達にクリスマスプレゼントに作ってあげたのね、そしたらば、とても喜んでこれもしかしたら東急本店が出来たから行ってごらんさいよって言われて。

^{わたくし}

私、腰が抜けそうになったの

友達にあげた帰りに残ったのをガチャガチャ持って行ってみたの。私の荷物をショーケースの上に置いていたらそこからネックレスが首出しちゃって。ご主人が「これは何ですか」って言うから「私が作ったネックレス」って言ったら「先生（笹本氏）が作ったの！？」って。先生になっちゃったの。母さん来てごらんよ。ここに素晴らしい先生がいるって。これ6500円、こっちはもっと玉が多いから8000円って。私、腰が抜けそうになって。わからないもの、自分で作ったものをね。色んな色のこのくらいの玉にガラスが溶けて馴染んで綺麗なの。それは絵をやっていたから強いから。

-今の“^{わか}若い^{ひと}人”にむけて-

——池田「今、若者もたくさん写真を撮る時代になっていると思います。事件がおきた時、誰もが写真が撮れる中で、若者に対してどう思われていますか？」

機械だよりになっている。私たちにはそれができなかった。木を前にして景色をやるとか考える、機械は「優しすぎである」と思いますね。

-女性初の報道写真家にとって“^{カメ}写真^ラ機”とは何か-

——池田「笹本さんは長年カメラと付き合っただけだと思んですが、笹本さんにとってカメラとは何ですか？」

洋裁もそうですしね、カメラは創作の手段に使っている。写真というのは機械だから思うようにはならないことも。こういうのなら粘土こねて自分でできるけど（笹本さん創作のネックレスを指しながら）。カメラっていうのは機械ですから制約はありますけれど、それだけ優しいと言えば優しい、例えばこういうの（机の上の写真集を指して）ができちゃうから。

—笹本恒子は“表現者”^{アーティスト}—

—池田「笹本さんは自分の事をジャーナリストと思っている訳ではない？僕から見て『アーティスト』であると思ったのですが。」

結局そうです、アートですね。何でもそうなのよね、結局感動して飛びついちゃう。知らないうちに貼っちゃうのよね。そう、そんな風にして欲張りか好奇心が強い。

—池田「まだやりたいことってありますか？特にカメラを使ってやりたいことって。」

もう後、二冊位本を書きたい。

—池田「今書かれているのはどういった本でしょうか？まだ非公開ですか？（笑）」

花に対する本ね、例えば誰々先生の所にインタビューにいったご話で、帰ろうとしたら際に何とかなの花が咲いていたとかね、そういうのとかね。だから花を色んな形に使って花をみるたびに、父のかわいそうな最期を思い出すとかね、そういうような。ちんちょうげであり、野の花でありね。^{むろうさいせい}室生犀星⁵は露草、あんなに怖い顔をしているのに露草、ね。

露草が大好きなんですよ（声を上ずらせて楽しそうに話す）。カチカチでとっつきにくい。でも何とかお話を一応してね。そして露草の花を表紙にして書いている本があるの。そしたら夏草の中で露草が一番好きって書いてあって。あんな怖い顔してね。驚きましてね。

—私達の“悩み”^{なやみ}—

—大串「あと、もう一個あるんですけども、私自身今21でこれから」

いいなああああ！！！！（とても明るい声で。）

⁵石川県金沢市生まれの詩人・小説家。代表作に『蜜のあわれ』などがある。

——大串「これから就職活動があって、どういうお仕事に就くかとか考えていて。女の人って家庭とお仕事があるじゃないですか。両立が凄い気になっていて。笹本さんは凄い沢山仕事をされていて、“お仕事第一”という印象を持っていたんですけども、その点においてどう思われますかね？女性はどういう風に、どういう生き方をすればいいんでしょうか。」

だからね、それはね。自分で好きな仕事に就いた方が。お料理が好きとお裁縫が好きとかね。お花こういうのが好き、とかデザインが好きとか。何が好きですか？歌うたうとか。

——大串「歌、私結構笹本さんと似ているタイプで好奇心が旺盛で、アートの方が割と好きなんですね。音楽が好きで。」

ああ、そうなんですか。私音楽は一番下手。（笑）これから写真をやってもいいし、絵を描いてもいいし、絵心があれば写真は入りやすいしね。こうやって構図画もみんな絵になるでしょ。これから学校にいらっしゃるの？

——大串「学校…就職先というと企業に入っちゃうと思うんですけども、今は学生で3年生なんです、来年に卒業なんですけど。」

だからね、お家が出してくれれば全然いいけど。自分でお仕事しながら勉強する方法もあるわよね。そういう風にね、親御さんの場所でやるのは楽なんだけどもね。出来ない場合は自分で働いて時間を出してね。わたくしなんかも兄弟がやっぱり大勢いましたから。なんとか自分で働いて、勉強しようと思って。昼間ちょっとお勤めして夜いったこともありました。

働くことはお金儲けることで。自分で勉強しようって思うものを決めてね。ただこうお金貯めたってしょうがない。お洒落してもしょうがない。それで洋裁するなりね。創作。頭使って創作する仕事をやりなさい。そうすれば飽きませんからね。文章を書くこともそうだしね。

——大串「なかなか運がないとそういうお仕事には進めないと思うんです。」

運なんか駄目よ。自分で努力する。

——大串「努力すればできますか？」

大丈夫、大丈夫。だから滑り落ちたらまた違う道から登る。それだと、こんなもの（机上の手作りアクセサリーを指して）作ってみたりしてね。それがものすごく売れてびっくりして。だからいつも自分が行きたいところを目当てにこっちの道から、こっちの道から、進んでいくってこと。

——池田「沢山の山を登られていますもんね」

この道から落っこちたらこの道から登る。だけど目当てはここにある。一つのね、想像の世界。結局ね。

——大串「最後に。笹本さんにとっての頂上って何ですか？」

やっぱり創作の世界ですね。

<取材を終えて>

笹本氏は103歳ということもあり、普段このような目上の方とお話する機会はあまりない。したがって、笹本氏にお会いするまで池田と大串は非常に緊張していた。しかし、我々は年齢を感じさせない素敵な魔女のお話に引き込まれ、気が付けば和やかな雰囲気取材を進めることができた。

初対面で人を虜にする笹本氏にとって「女性初の報道写真家」という職業は天性であったに違いない。まさに“微笑女”（河邑厚徳監督の言葉より引用させて頂いた）だと言うのが正直な感想であった。

体調が優れない中、長時間取材を受けて下さった笹本恒子氏に心からお礼を申し上げたい。また取材を設けて下さった笹本氏の姪さん、マネージャーの方、取材にあたり適切な助言を下さった河邑厚徳監督、及び高橋恭子教授にも同様に感謝させて頂いている。

私の辞書には不可能という文字は無い。

フランスの軍人ナポレオン一世が放ったとされる言葉だ。
女性初の報道写真家、笹本恒子は自身の著作「ライカでショット！」
の裏表紙にその言葉を写生している。

間近でお会いした笹本氏は、その言葉に相応しい、アートを追求する好奇心ガールだった。笹本氏は今でこそ「フォト・ジャーナリスト」として活躍されているが、報道写真家になった当初は「女性が何の権利も持たない」時代であった。時代の荒波に揉まれ、一時は報道写真家としての活動を休止していた時期もある。



↑ 笹本氏(右)と著者・池田(左)

しかし逆境の時代でも笹本氏は洋裁や小物製作といった趣味の才能を遺憾無く発揮され、生計を立ててきた。元々は画家志望であった笹本氏にとって写真は馴染みやすい道であったようだ。

笹本氏にとって「カメラとは何か」とお聞きした。「相棒」という発言を心の内では想定していたが、実際の答えは異なっていた。笹本氏はカメラを「創作の手段」としている。現代の日本において最もカメラに触れてきた女性は笹本氏だ。その彼女にとってカメラとは「相棒」でも、ジャーナリストとしての「武器」でもない。自己表現の「手段」である。

この言い方は非常にフラットだ。八十年を共に過ごしたカメラはあくまで創作の手段の一つ。趣味の洋裁も、絵を描くための絵筆も、生花をするための花も、全ては笹本氏にとって沢山の内の「手段の一つ」なのだ。カメラだけを手段として最良することは創作の幅を狭める。また、機械頼りにもなってしまう。創作の幅を広げるために、笹本氏はあえてカメラとフラットに接している印象を受けた。

結果として、例えば「生花の感性」と「人を惹きつける絵の構図」を生かした「イトコ取り」の作品が創作される。それを自然と、好奇心でやってのけてしまう笹本氏は「天性のアーティスト」であるのだろう。そして、その軸は百三年間ぶれず、笹本氏の人柄や人格に確実に表現されている。どこかミステリアスで御伽話にでてくるような「優しい魔女」らしさはどこか人を安心させる。創作は自らを魅力的に形作る魔法だ。

私達は二十一歳で、これから就職を迎える。笹本氏が生きた激動の時代とは異なり、誰もがなりたい職業を選ぶことができる。だからこそ、ただお金を貯めても仕方がない。就職は手段の一つであって目標ではない。その先に何を創り出すかは私達が決めることだ。人生の登り方は人それぞれで、どの山を頂上とするかも各個人で異なる。百三歳の微笑女は「滑り落ちたら違う道からまた登ればいい」という最高のアドバイスを今の私達に寄せてくれた。

運なんかじゃない。常に努力。

日本は戦前、女性に何の権利も与えなかった。料理や洗濯、子守りなどの家事をすることだけが女性の務めだった。そんな中で明治の女性たちは勉学に励み、社会の流れに屈することなく計り知れない努力をして、一流の作家や絵描きになった。笹本恒子氏は考えた。明治の社会に女性の名前が出ることは男性の名前が出ることよりも一層大きな努力が必要である。それでも諦めずに努力して夢を叶えた彼女たちの姿を後の世に残していきたい、と。



↑ 笹本氏(右)と著者・大串(左)

笹本氏の代表的な写真集、それは『きらめいて生きる明治の女性たち』である。著書のあとがきで「私の数枚の写真と短いコメントでは、とても全容を表すことができないのが残念です」と笹本氏は述べていた。しかしながら、笹本氏の写真は1枚1枚が白黒写真であるのにも関わらず、明治の女性たちの鮮やかな美しさを際立たせていた。

堂々と、つよく、そして優しく。明治、大正から昭和の終戦までの男尊女卑の時代を生き抜き、戦後の新憲法の下で選挙権を獲得した明治の女性。彼女たちの瞳、凛とした立ち姿に私は見惚れ、憧れた。笹本氏は明治の女性を尊敬し、彼女らのつよい生き方に自然と感化された。だからこそ今の笹本氏がある。笹本氏自身も明治の女性たちに負けない美しさを秘めている。実際にお会いしてみて、そう感じた。

時代は変わり、今では社会的に活躍している女性も多い。一方で残念なことに、男女平等とは思えない、女性へのハラスメントの悲しい事件や出来事も絶えない。女性が社会的にチャンスを得るにはまだ壁があると感じずにはいられないことがある。

笹本氏は言う。自分の努力次第でどうにでもなる。山の頂上への一つの道から転げ落ちたのなら他の道から登ってみればいい。その繰り返し。運なんかじゃない。常に努力。私は小学五年生の頃、ある一冊の本に出会った。アレックス・ロビラ作の『Good Luck』である。そこには次の様なことが書いてあった。

幸運をつかむためには、自ら下ごしらえする必要がある。よくするばかりでは幸運は手に入らない。幸運をよびこむひとつのカギは、人に手をさしのべられる広い心。自分には幸運が訪れると信じ、甘い言葉には耳を貸さぬこと。幸運というのは、チャンスに備えて下ごしらえをしておくこと。だがチャンスを得るには、運も偶然も必要ない。それはいつでもそこにあるものなのだから。幸運のストーリーは…、絶対に偶然には訪れない。

笹本氏は自分を信じて諦めず、幸運のために下ごしらえを欠かさなかった。大きな勇気と好奇心を持って。そして女性だから無理だという固定観念を破り、女性初のフォトジャーナリストとして輝いた。笹本恒子氏が憧れた明治の女性たち。その姿を今の若い女性にも一度見て欲しい。しっかりと地に根を張り、我慢強く冬に耐えて、大きく美しく咲いた花たちを。さて、私は一人の女性としてどう生きていこうか。